

序

1993年のある日、東洋哲学研究所委嘱研究員・水船教義氏より、ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本 (No. 4-21) の美しいカラー写真が、筆者の手許に送られてきた。1981年にドイツ、ゲッチンゲン大学・インド学仏教学研究所以て、同写本の複写本を見る機会を得、他の二つの貝葉写本と共に全体に眼を通して整理をし、報告書をハインツ・ベッヘルト教授に提出して帰国した。これらの写本の複写本は、技術的な問題で細部まで正確に読解することはできなかった。東洋哲学研究所提供の写真により一気に読み上げ、1994年10月に手稿本は完成した。1994年4月に同研究所より正式な依頼を受け、「ローマ字転写本」を出版する計画が成り、1997年3月印刷のための原稿の完成をみた。

この写本の影印版を作成するために、1997年11月1日夕、インド大陸に渡りカルカッタ経由にて、遙かヒマラヤの山々を越えてネパール王国首都、カトマンズに降り立った。ネパール国立公文書館に蔵せられている梵文法華經貝葉写本の3本を、我が国有数のカメラマン松岡承一氏の手によって、精巧な写真に撮ることができた。また、写本の実物に当たって、不明な箇所を正確に読むこともできた。ドイツ留学以来夢に見た写本を眼前にして、筆舌に尽くせない感動を覚えた。美しい雪を頂くヒマラヤの麓で至福の時を過ごすことができたことは、まことに無上の喜びであった。

本書の第1巻は、ネパール国立公文書館所蔵梵文法華經写本 (no. 4-21)⁽¹⁾ の fols. 1b–90b, 1すなわち、ラーフラバドラの「妙法蓮華讚頌」(Saddharmapuṇḍarīkastavaḥ) および第1章から第10章までのローマ字本である。第2巻は fols. 90b, 1–179a, 2すなわち第11章から第27章までを収める。この写本は二つの部分より構成されている。Fols. 1–176, fol. 178b (A本) と fols. 177, 178a, 179a (B本) とであり、総計179枚を計える⁽²⁾。

Fol. 176a と fol. 177a の両者の書き出しは、いずれも “*nayutaśatasahasrā(sic)samudānitām*” (ケルン・南條本 484.8) であり、fol. 8a と fol. 179a は、いずれも “*mānuṣaṃ jinasya muktā iha ekaraśminā (B: ekarasmi vā) /*”⁽³⁾ で始まっている。このことからして、B本は、A本を写したものである。写しではあるが、B本にはA本にない奥書が加えられている。この奥書には、“*nepālavatsaraśatadvitaye prayāte ekādhi(ka)saptatisamāyu(kte) [ji] caitramāse / ānandadevanṛpateḥ parivarddhamāne rājye vipakṣabaladālanacaṇḍanīteḥ //*” (178a, 2) とあり、ネパール暦 271年 (西暦

序

1151年)のチャイトラ月(3-4月に相当)⁽⁴⁾、Ānandadeva 王の強力な統治下で書写されたものである。L. Petech によれば、Ānandadeva 王の在位は、西暦1147-1167年である⁽⁵⁾。従って、A写本の書写年代は、B本と同時代か、あるいはそれより以前、およそ12世紀前半と言えよう。写本の最後の部分が二つあることは、ケンブリッジ大学図書館所蔵本(Add. no. 2197)⁽⁶⁾に見られ、書写年代の書き方は、同写本の第一本(131b, 3)⁽⁷⁾に似ている。

このB本の奥書には、「縁起法頌」(Pratītyasamutpādagāthā)⁽⁸⁾がある。この頌は、北京・民族文化宮図書館所蔵本(no. 0004)⁽⁹⁾ fol. 137a, 3, 大英図書館所蔵本(Or. no. 2204, 12-13世紀書写か) fol. 176a, 5 およびネパール国立公文書館所蔵本(no. 3-678) fol. 139b, 2に見出される。

第27章の章名は、ケンブリッジ大学図書館所蔵本(Add. no. 1683) fol. 140b, 1, 北京本 fol. 137a, 1と同じく、この写本のA本 fol. 178b, 1, およびB本 fol. 178a, 1には、“... sa=[mā]ptāvīmśatimah yathāsukhavihārārocanaparivarttaś cēti”とある。「安楽に過ごされるようにと告げる章、第27」という意味で、第27章の後半の内容を採って名付けている。一方、ケンブリッジ大学図書館所蔵本(Add. no. 1684) fol. 156b, 4 および同大学所蔵本(Add. no. 2197, A本, B本)⁽¹⁰⁾ fol. 131b, 2, fol. 132b, 1にある“anuparīdanāparivarttaḥ”「委嘱の章」は、この章の前半の内容を採って名付けている。筆者の読んだ限りでは、これら以外の写本には章名はない⁽¹¹⁾。

この写本のテキストは、大体において、ケンブリッジ大学所蔵本(Add. no. 1683) および北京本のそれに似ていると言える。ケンブリッジ大学所蔵本(Add. no. 1682)も考慮に入れてテキストを読む必要がある。何故なら、Add. no. 1682のテキストは、ネパール貝葉写本の中で、より古く、良い読みを保っていると筆者は考えているからである⁽¹²⁾。また、この写本及び上述の3写本のテキストは、ネパール貝葉写本の中では古い部類に属すると考えられるので、重要である。

なお、この写本には、誤字、欠落および錯簡が多く見られるので注意を要する。40/127; 46/133; 60/147; 72/159; 83/170; 60a/60b; 113a/113b; 116a/116b; 122a/122b; 143a/143b; 155a/155b; 158a/158b; 168a/168b は、相互に入れ替えて読まれねばならない。Fol. 87 は、fol. 99a, 3cの“... kuladuhitā vā imam”の後に続く。Fol. 87の終りは、fol. 100a, 1aの最初にある2語“aṣṭavarṣā jātyā”に飛び、そのあとはfol. 99a, 3cの“mahāprājñe ...”⁽¹³⁾に続いている。第7章 fol. 62b, 4にはケルン・南條本160.7-165.9に相当する文が欠落している。このような難点があるとはいえ、ネパール系写本の解明には、この写本の研究は不可欠である。

文字は、ネパール国立公文書館のカタログではランジャンナー(Rañjanā)体としている⁽¹⁴⁾。

おわりに謝意を述べてこの序を結びたい。筆者が、1980-1981年に、ドイツのゲッチンゲン大学・インド学仏教学研究所に留学中、この写本の複写本をわざわざベルリンより取寄せて与えられたハインツ・ベッヘルト教授に感謝せずにはおられない。

1997年11月、ネパール国立公文書館に、この写本の写真撮影のために赴いた際、ご高配に与った現ネパール政府考古局副局長サニマイヤ・ラナ女史(当時国立公文書館長)並びに公文書館研究員シュクデーヴ・Sh・ギャンワリ氏にお礼を述べたい。また筆者を派遣さ

れた東洋哲学研究所当局の方々に、心より謝意を表したい。ことに、同研究所水船教義氏は、この出版に対して精力的に協力された。記して謝す。また、種々お世話になった川村良子女史、ケーシャブ・B・シュレスタ氏にもお礼を述べたい。

さらに、ビレンドラ・ビール・ビクラム・シャハ・デーヴ国王陛下の賢明なるご指導のもと数多くの貴重な写本を保存されてきたネパール王国およびネパール国民に衷心より敬意を表したい。これまでの筆者の写本研究はネパール王国に伝承された資料から大いなる恩恵を蒙っている。本書がネパールの学術文化の興隆、また日ネ間の友好促進の一助ともなればこれに勝る喜びはない。

1999年3月16日

戸田宏文

注

(1) *Sanskrit Lotus Sutra Manuscript from the National Archives of Nepal (No. 4-21), Facsimile Edition*, Lotus Sutra Manuscript Series, 2-1, published by the Soka Gakkai in cooperation with the National Archives of Nepal, Tokyo 1998.

Sūcīpatra, (Bauddha viṣayakā hastalikhita granthaharūko), bhāg-1, (Abhilekha Prakāśanamālā-5), Rāṣṭriya Abhilekhālaya (National Archives of Nepal), 2054 (1997 C.E.), p. 67, no. 85. Nos. 84, 86 をも参照。

Claus Vogel, "The Dated Nepalese Manuscripts of the Saddharmapūṇḍarīkasūtra," *Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, I. Philologisch-historische Klasse*, Göttingen, Jahrgang 1974, Nr. 5, p. 199.

Sanskrit Manuscripts of Saddharmapūṇḍarīka, Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia, Romanized Text and Index, vol. 1, Tokyo 1986, p. (12), 12–13), p. (37), N1 (table). この記述は、再考されねばならない。

(2) A本は fol. 178b で完結する。

(3) この一行は、東京大学図書館所蔵本 no. 412 (貝葉本) と no. 409 (紙本) にのみ見出される。No. 409 の前半部分は、no. 412 に合致する。

(4) 蔣忠新, 『民族文化宮図書館蔵 梵文《妙法蓮華經》写本 (拉丁字母転写本)』中国社会科学出版社, 北京 1988, Introduction, pp. 9–11.

(5) Luciano Petech, *Mediaeval History of Nepal (c. 750–1482)*, Serie Orientale Roma, LIV, second, thoroughly revised edition, Rome 1984, pp. 61–67.

(6) Willy Baruch, *Beiträge zum Saddharmapūṇḍarīkasūtra*, Leiden 1938, p. 2 Cf 参照。この写本 (Cf) は、何人かで書かれているように見える。なお、ネーワリー体で書かれた7葉の写本 (fols. 7, 43, 57, 75, 115, 121, 122) のテキストは、ケンブリッジ大学図書館所蔵本 Add. no. 1683 のそれに類似する。

(7) Vogel (1974), p. 201, (5), Petech (1984), p. 49, 3).

(8) 湯山明, 「《十二因縁呪》覚え書き」『印度学仏教学研究』20-1, pp. (48)–(52) 参照。

塚本啓祥, 『インド仏教碑銘の研究』I, Text, Note, 和訳, 京都 1999 参照。

(9) 『民族文化宮図書館蔵梵文具葉写本之一 妙法蓮華經』(影印本) 北京 1984. 以下「北京本」と略す。

(10) Add. no. 2197 fols. 76–78, 83ff. (fols. 115, 121, 122を除く) は、Add. no. 1684に合致する。

序

(11) チベット訳には “yoñs su gtad pa” (Skt. anuparīdanā-) なる章名が見える。蔣忠新 (1988) Introduction, p. 11 参照。なお、「我々がこれまで見た他の全ての写本には “anuparīdanā” なる章名がある」とする記述は再考されねばならない。

(12) Hendrik Kern, trans., *Saddharmapuṇḍarīka, or The Lotus of the True Law*, SBE, vol. XXI (1884), pp. xxxviii–xxxix. ここに “London codices” とあるのは、複数本を意味している。しかし実際には The Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland, London 所蔵本 no. 6、すなわちケルン・南條本 (1908–1912) の “A” を指す。それ故ケルンの記述は正しくない。(ビュルヌフの仏訳 (1852) pp. 356, 418 参照。) “A” は紙本であり、ケンブリッジ大学図書館所蔵本 Add. no. 1683, Add. no. 1682 (いずれも貝葉本) とは、系統を異にしており、一致しないことは顕著である。従って、“A” が Add. no. 1683 と類似点を多くもつというケルンの理解は正しくない。

“The Paris MS.” とは Société Asiatique 所蔵本 no. 2 であり、ビュルヌフの依用本である。しかし、ビュルヌフはチベット訳を参照して仏訳を完成している。仏訳の「注」にある “les deux manuscrits de M. Hodgson” は、Bibliothèque Nationale 所蔵の nos. 140–141 (ビュルヌフの第一写本; W. Baruch の Pb), nos. 138–139 (第二写本; Pa) の 2 本を指す。ビュルヌフ仏訳 p. 418 参照。Société Asiatique 所蔵本と Bibliothèque Nationale 所蔵の 2 本とは、系統を異にしており、そのテキストは必ずしも一致しない。なお、Bibliothèque Nationale 所蔵の 2 本は同じテキストを有しているので、同一本と見てよい。Baruch (1938) p. 4, Pa, Pb 参照。

同じことは、ケンブリッジ大学図書館所蔵 Add. no. 1032 (Cd) と Add. no. 1324 (Ce) との 2 本についても言える。カルカッタ・アジア協会所蔵本 no. B7 (Aa) と no. 4199 (Ac) も同様である。Baruch (1938) p. 2, Cd, Ce, pp. 3–4, Aa, Ac 参照。なお W. Baruch は、Aa, Ac と Cd, Ce はある特定のグループに属するとするが、厳密に精査すれば、必ずしも一致しないことが判る。むしろ Aa, Ac はロンドン・王立アジア協会所蔵本 no. 6 (W. Baruch の R, ケルン・南條本の A) に類似する。従って W. Baruch が「R は Aa, Ac, Cd および Ce とともに一つのグループに属する」とする記述は、厳密な意味では正しくない。

(13) 「写真版」 p. xix 写真版使用に際しての留意点 (2) の “mahāprajñe . . .” は “°prā°” の誤り。

(14) *Sūcīpatra*, p. 67, no. 85, ビュルヌフ訳 p. 373 参照。C. Bendall カタログ p. xxi では、Kuṭila とする。